Vol.2017-CE-142 No.31
Vol.2017-CLE-23 No.31
2017/12/10

教員は学生の LMS アレルギーにどう向かい合うべきか

小川健[†1]

概要：LMS の活用が大学の教育現場で叫ばれて久しい．実際に数多くの LMS 活用事例などが本研究会・本学会を始め数多くの所で報告されている．しかし，LMS で全てを行える所とは異なり，LMS に関して全体として消極的な大学の場合には，教員個人で LMS の各種機能を活用しようにも，普段使わない機能などの場合には学生の LMS に対するアレルギー反応・拒否反応が散見されることが非常に多く，本報告者も「頼むからやめてくれ」等の学生の切実なる声を，心を鬼にして踏みにじらざるを得ない状況も数多く体験している．一見便利として導入が進みつつある LMS についても，学生の反応は多種多様で，LMS の方が良い(大学指定の LMS にしてくれ)という反応と LMS アレルギーが見られる反応とが学生の間でも混在する中，教員は対応に追われることになる．学生にとって最も楽だと思うものは大きく異なるが，そのことに画一強制を当てはめるとうまくいかず，その反面多様な取り組みは教員の無意味な負担増ともとられかねない．本報告では，普段は(スキャナで読めるマークシートやフリーのオンラインストレージ，無料でとれる QR コード等を初め)LMS 以外の情報システムを駆使している教員が, 大学採用の LMS とそれ以外の(LMS ではない)ものとの利用体験を基に，教員が学生の LMS アレルギーにどう向き合うべきかについて考察する．なお本報告者の所属大学では CoursePower と Respon という異なる会社の LMS・クリッカーを採用しているが，システム体系に囚われない共通部分は有ろうかと思われる．

キーワード：LMS，LMS アレルギー，利便性，拒否反応，複数の選択肢

How should faculty face students' LMS allergy?

TAKESHI OGAWA[†1]

Abstract: Different to the schools in which LMS must be used, there are not few students who hate or deny advanced ways of LMS system in which using LMS (Learning Management Systems) are optional. In this presentation, consider the way to meet LMS allergy. This presenter usually use another information systems (not LMS) except for the university's official LMS, but this presentation compares both.

Keywords: Learning Management System, LMS allergy, Convenience, Response of Deny, Multiple Choices

1. はじめに

2 昔前と異なり，LMS (Learning Management System)は今や多くの大学で欠かせない教育システムとして導入されている．フリーの moodle だけでなく数多くの有料も含めた LMS が導入されていて，講義資料のオンライン提供，連絡事項の掲示，レポートの回収と返却，オンラインテストの実施，学生との質疑応答，出欠席の取り扱い，更には講義成績の入力に至るまで, LMS の活用可能性はまだまだ大きい．今や LMS 無しでは大学教育が成立しえない大学も珍しくなくなった．

しかし，全学的に全ての講義で完全・統一的に LMS を導入・利用し，大学教育における全ての履歴を設定していて学生・教員共に LMS の色々な機能を使いこなせている大学とは異なり，LMS の導入が形式的または LMS の利用は選択的である大学も本学を初めまだまだ多い．そうした所では，普段からよく利用するような仕組みに関しては許容可能でも，普段からは使わない LMS の機能については拒否反応を示す例も決して珍しくない．そうした所では LMS の使い方に関しては伝えたと事務方は言い張っているが，学生からすれば慣れるまで教えられた感覚は無く，そのため貴重な講義の時間を削って（簡単な説明だけでは済まない場合も多く）長時間をその説明に割く等の状況でもしない限りは, 学生には使えない状況になることもある．こうした中では，普段は慣れていない機能を用いようとするとまず拒否反応が（現在 LMS 関係の報告の多くで課題として挙がっている教員側のシステムアレルギーではなく）本来は情報関係に慣れていると思われる世代が多い学生側の中から LMS アレルギーが出て来ることになる．その結果，そうした学生アレルギーを強権的に押さえ付けない限りは，せっかく開発・導入された LMS の利便性が高いと思われる機能も宝の持ち腐れとならざるを得ない．

そうした LMS に対する慣れは世代ごとで区切れるような状況ではなく，個人差が大きい．学生からすれば何やら訳の分からない仕組みで教員が自らの単位習得機会を削ぐ強権を発動しているに過ぎない状況に見える訳であり，学生の修学意欲・勉学意欲を削ぎ，ひいては大学に対する悪印象から大学評判を LMS の不慣れな機能が下げる要因になっているのが現状である．

中には，LMS や大学公式の（メールや PC 室利用などの）

†1 専修大学
Senshu University.

ⓒ 2017 Information Processing Society of Japan

アカウントに関してそのパスワード等を忘れたままログインできずに放置している学生も珍しくなく，ログイン可能なように復旧する仕組みも流れ作業的に可能ではない所もる事自体，学生には酷な状況である．紙媒体で普通に提出し講義中に（昔の講義資料や返却されたレポート等を）受け取れることの方が余程有り難いが，LMS を活用するということはそうした状況から脱することを本質的に意味する．

特に公式のメールアドレスについてはそのパスワード紛失放置は激しい例も珍しくなく,「公式のアドレスに送るから見ておくように」は空文に過ぎない事例も珍しくない．ここで強権を発動して，見ないと単位を認定しない，とすることは教員には楽で便利かもしれないが，学生の教育に対する満足度は決して上がることはなく，大学の評判を下げることにしかならない．

本報告ではこのように，学生の LMS アレルギーなどについて，大学公式の LMS 以外も積極的に活用してきた報告者だからこその論点を中心に報告するものである．その本質的な部分としては, できるだけ多様な選択肢を確保し，できるだけ学生にとって慣れているものが使える形を確保することで, LMS 等に利便性を感じてもらうように仕向けることの重要性を説くと共に, LMS に対する強制の強権発動への疑問を呈し，不要な情報は敢えて取らないべきであるとするものである．

2. LMS アレルギーその 1:講義資料提示

LMS アレルギーの中で比較的大きいものの 1 つが講義資料の提示に関するものである．オンラインでの講義資料提示は休んだ学生に対する対処等を初め，教育効果を測る基礎資料としてのアクセス履歴の確保など重要な点も多いとされる．中には反転授業のように，先に見るべき講義資料を提示して見させることにこそ意味がある教育方法もある．

しかし，講義中・講義後に休んだ学生から「前回（ないし指定した過去の回の）講義資料を頂けませんか？」という切実な要請は，どれだけ講義資料をオンライン化したとしても残る部分ではある．また，教員の講義資料印刷の手間を省くという観点から，講義資料はオンラインに上げるから印刷などは(必要な範囲で)各自で行ってくるように，とする事例もあるが，その結果起きることは講義時間の冒頭に PC 室が印刷待ちとなり，講義開始に学生が集まらないために必要な連絡が冒頭告知では学生に伝わらず，講義開始も遅れる等の状況である．

ここで基本的な認識として確認をしなければならない点として, 講義資料のオンライン化は学生にとっては「権利」でこそあるべきで,「義務」であることに関しては（教員側のやむを得ない状況を除いて)最小限に留めるべきである，という点である．

また，教育効果測定を研究上必要として行う場合はログイン履歴などの重要性はあるが，そうでない場合までログイン履歴が必要になるわけではない．ログインができない状況，ログインが精神的に足かせになっている状況により講義資料に事実上学生がアクセスしない・できないことによる教育効果の減少の懸念はログイン履歴からは分からない．その反面，慣れた通常の LMS が良い学生もいる．

通常の LMS はログイン無しに使える状況設定にすることは 1 教員で選択できることではない．従って，学生の講義資料へのアクセス権を本質的に確保するには，通常の大学公式の LMS だけでなく，(OneDrive や Google Drive,そして DropBox 等のように)大学公式の LMS 以外の「オンラインストレージ」を双方利用し，大学公式「以外の」オンラインストレージには「ログイン無しで」アクセスが可能な状態にすることこそが求められる．こうすることで，大学公式の LMS にのみ慣れている学生にも，大学公式の LMS に拒否反応を示す学生にも講義資料へのアクセス権を本質的に確保できるのである．

講義資料の印刷等に関しても（板書にノート型の講義では別であるが）PowerPoint 形式を初めとするスライドで行う講義などの場合にはその資料の印刷は，学生の講義資料へのアクセス権とその教育効果への影響を考える際には，完全版である必要はないにせよ（ポータブルタブレット等の学生全員への配布などが出来ている稀有な大学を除き）「教員側が」印刷しての配布をすることが本来的にはやはり望ましいと考えられる．通常，講義資料の印刷に際し，教員側が（履歴を取られることはあっても）狭義の意味で枚数制限がかけられる事例はそこまで多くはない．教員が講義資料を印刷したせいで自分の研究に必要な印刷枚数を確保できなくなった等の状況は通常考えにくい．しかし，学生には PC 室等での年間の印刷可能枚数に制限が加わっていることが多く，無制限で使える訳ではない．講義資料の印刷にその貴重な枚数制限の多くを取られる状況は，学生の教育・研究に対する大きな足かせとなるのである．

教員側のやむを得ない事情は色々なことが考えられるが, 例えば「休んだ回の講義資料」を学生の要請すべてに出せるように，過去の講義資料全てを持って講義に来る事態の回避等が考えられる．中には過去に配布されたが忘れたので受け取りたい，という場合で，1 人 1 部での資料印刷で足りない予測を働かせる必要が出て来る場合もある．こういう観点からは,「オンライン化」で対処する，という部分には一定の合理性がある．

関連して，大学公式以外のオンラインストレージを利用する際に「URL だけ」では現在，学生の講義資料へのアクセス権を充分に確保できない. URL に関して理解している学生ばかりとは限らず，検索バーに URL を入れて http://が重なって「開けない」という指摘が出る例，URL が長くて入れるのが学生に困難となる場合等がある．例えば urx.nu 等の「無料 QR コード作成機能付き短縮 URL 作成」

等を利用して講義資料への QR コードを作成し，URL を理解していない学生へも講義資料のアクセス権を確保することが求められる．報告者が大学公式以外のオンラインストレージで試した限り，講義資料への QR コードを毎回配布資料の冒頭に付けておくことで，穴抜き等の講義資料を配布しても QR コードからアクセスして講義資料を確認している事例が多いことを確認している．中には大学公式の事例もあるが，ログイン履歴を残したくない学生への配慮などから，大学公式以外も活用することは重要である．

一部には「学生への甘やかし」と取る例もあるかもしれない．しかし，学生に対する要求水準が高すぎることは学生の大学・講義に対する満足度ひいては大学の将来的な評判を下げる要因になりかねず，色々な学生に対応できることこそが意味のある対応と呼べるのである．

3. LMS アレルギーその 2:短文回答・解答など

LMS アレルギーの 2 つ目には，近年「ミニッツ・ペーパー」として行われてきた，短文回答項目等が挙がる．講義の感想からショートクイズに対する答え，そして報告者がミニッツ・ペーパー代わりに通常の講義の多くで取り入れている指定文章記入など，短文で回答・解答する事例に対してのものが挙がる．asahi.net での respon に代表されるように「クリッカー形式」を拡張しての短文入力形式も近年では LMS 付随として多く登場し，また，LMS 自体にも直接文章を入れる形式も多くでは取れる．

しかし，LMS アレルギーはここでも悪い意味で「活躍」する．現代の学生の中にはキーボードよりフリック入力の方が慣れている人も少なくないが，LMS へのアクセスのし易さに個人差が激しい場合，LMS に入力させることを（コンピュータ室ではない講義室での）通常の講義中に要請する場合には，拒否反応なしに実現することは，まず拒否反応から始まる．そのようなものを利用する教員側が特殊なのであると学生は判断し，可能な限り無しで乗り切れるような「権利」を勝ち取ろうとすることと闘わない限り，そのようなことを実施することはできない．そしてそのような不毛な争いは，余程慎重に取り組まない限りは大学・講義への満足度ひいては大学の評判を無駄に落とすことになりかねない．そうした学生の多くは「直接書いて出して」ということできっちりカウントされる，採点などの教員側労力については学生の考慮外で当然実施されて然るべき，と考える場合が多い．

もちろん学生の中には「フリック入力」の方が書くより早い，等の人もいるので，学生の反応権の確保という観点からは「フリック入力」も「権利として」確保することは大事である．しかし，直接手作業で書く方が有り難い，という学生も決して少なくない．その観点からは，フリック入力用のオンラインフォームと手書き用紙の複数を用意し，きっちり教員側で迅速に採点して整理・反映させることがどれだけ教員にはきつくても本来は教員側に求められてしまうのである．そしてその多くが採点されて返却される際には，その回または次の回の講義で，手渡しで受け取れる形式が求められるのである．時間の迅速さとの兼ね合いを考えれば，学生自身が自分の採点されたものを取っていける形式が本来は望ましい．しかし，人数が多い場合に一か所に置いてしまうとその取得だけで時間がかかり過ぎる．それだけでなく，現在の個人情報保護が厳しくなっている場合には，学生が取り間違えた場合でさえも「他人の成績情報を不要に別の学生に伝えた」ことになるので，教員側の管理責任が問われてしまう．

報告者はこれらを考え，オンラインフォーム以外の「ミニッツ・ペーパー」型の手書き用紙については，スキャナで読める OMC(マークシート等)の記述式用紙を利用し，読み取って電子メールで「画像などの形式で」返却するようにしている．しかしその場合にも，こまめな採点が必要なことは予想可能としても（その用紙費用の問題は本学では残るにせよ），それ以外にも学生の「アクティブな（実際に受け取れる）」メールアドレスの確保が大きな鍵となる．受講生が普段利用のアドレスを初めから提示している名簿など存在するはずもなく，受講生の登録・解除などもあることから，その都度対処が必要となる．最初は大学公式のアドレスから始めるにしても，大学公式のメールアドレスは読めない状態のまま放置している学生もいてその復旧が講義中に出来る訳でもないことに加え，普段は大学公式のアドレスを使わない人もいるので，普段利用のアドレスを「学生に書かせて」等の形で確保することが鍵となる．しかし，学生に手作業で書かせることは読めない状態を引き起こしたり，間違ったアドレスを書いてきたり，とする問題も多い．例えば表計算ソフト用のファイルに一括して入力させる手もあるが，1 つのシートに纏めてしまうと個人情報の漏えいの問題もあるので，可能ならばオンラインフォームから自動的に反映できる仕組み，特に実際にテスト送信して可能なもののみ反映させるような仕組みが望ましい．

また関連して，報告者は十分には反映できていないが，本来はマークシート型等でのテストにも，記述の方が早いのに，という不満の声も聞かれることがある．しかし，報告者の所属する中堅私大の経済系学部の場合には，数学の記述の答案を書く能力に劣る学生も少なくないので，どうした手順で求められたのか分からないようなメモ書きのような状態のまま（計算過程が一部省略され，しかも安産部分での誤り等も含んだ可能性のある形で）提出される可能性も高く，採点が出来なくなることには留意が必要である．

さらに，メール送信での返却に際しては，送信時間に関する要求が出ることがある．本来電子メールは「非同期性」つまり送信時間と受信時間が同じである必要がないことが大きな強みとして挙げられる．しかし，公式のメールアド

レスを強要する場合に正当化する事例として「転送」要請をかけさせる場合には，スマホ等に教員の都合で送ったものが，学生の不都合な時間に届きそれがその時刻に反応するように求められていると「勘違いする」場合がある．最も大きな問題点としては「睡眠の妨げ」という指摘も出ることがあり，時間配慮等が本来的には望ましい（ないし送信時刻を決めておくことが望ましい）となるかとは思われるが,「指定時刻・指定曜日等には同期しない」などのアプリを(スマホに入れられるように)紹介するという部分も，将来的な「時間間隔がずれている人とのやり取りの可能性」等も考慮に入れて行うことが望ましい．

4. LMS アレルギーその 3:レポートなど

LMS アレルギーの 3 つ目には，レポート等がある．その提出に関しては例外的に対処する程度でもなんとかなる場合が多いが，その返却などに関しては，紙媒体でも返却して「提出して見ない」ことへの対処策とするなどの配慮も必要になる．

5. LMS アレルギーのおわりに

LMS アレルギーは数多くの所で見られるが，教員が強権的に対処できる時代が終わりを迎えるに伴い，複数の色々な可能性を提示し，それに教員が対応することも必要になる．

謝辞　報告者の講義の受講者に感謝申し上げる．

ⓒ 2017 Information Processing Society of Japan